

HIV 関連リンパ腫治療の手引き作成

研究分担者 味澤 篤 都立駒込病院感染症科 部長

研究要旨 Acquired immunodeficiency syndrome（AIDS）に関連した非ホジキン悪性リンパ腫（AIDS-related lymphoma、ARL）の経験のない血液科医師および human immunodeficiency virus（HIV）担当医師を対象にエイズ関連非ホジキンリンパ腫治療の手引きを改訂しエイズ学会誌 2013 年 1 号で公開した。今後の改訂について引き続き検討を行った。

A. 作成目的

抗 HIV 療法および日和見感染症治療の進歩により、HIV 感染症の予後は改善した。しかし、AIDS 関連リンパ腫（AIDS-related lymphoma、ARL）に代表される悪性腫瘍による死亡率はいまだ高い。また欧米を中心にホジキンリンパ腫をはじめとする非 AIDS 指標悪性腫瘍による死亡率増加も指摘されている。また、ARL による「いきなりエイズ」の症例も多く、ARL は血液専門医が遭遇する可能性の高い疾患である。しかし、ARL の施設当たりの症例経験数は少なく、エイズ特有の合併症や標準的な治療法が確立していない。2009 年に「ARL の治療の手引き Ver1.0」を発表し、2013 年に原発性脳リンパ腫およびホジキンリンパ腫も含んだ「HIV 関連リンパ腫治療の手引き Ver2.0」をエイズ学会誌で公開したことは非常に有用であった。

B. 作成方法

手引きは、厚生労働省エイズ対策研究事業「HIV 感染者の長期予後を規定するエイズリンパ腫の全国規模多施設共同臨床試験の展開と包括的医療体制の確立」班のワーキンググループで、ARL の経験の少ない血液専門医および HIV 感染者担当医を対象に作成する予定である。特に 2014 年に新規抗 HIV 薬が導入予定であり ARL 治療時に併用しやすい抗 HIV 薬を最新の知見を取り入れ改訂する予定である。

ワーキンググループのメンバーは、主にエイ

ズリンパ腫の臨床経験豊富なエイズ・血液専門医と悪性リンパ腫を専門とする血液専門医により構成した。平成 25 年度中に 2 回の会合を行った。

表 1 . ワーキンググループメンバー

名前	所属
味澤篤	都立駒込病院感染症科
永井宏和	名古屋医療センター臨床研究センター
小田原隆	東京大学医科学研究所感染免疫内科
照井康仁	癌研究会有明病院癌化学療法センター
上平朝子	大阪医療センター免疫感染症科
四本美保子	東京医科大学臨床検査医学科
萩原将太郎	国立国際医療研究センター血液内科
田沼順子	国立国際医療研究センター エイズ治療研究・開発センター
岡田誠治	熊本大学エイズ学研究センター

C. 研究結果

HIV 関連リンパ腫治療の手引き Ver 3 を検討した。

D. 考察

ARL は標準治療法が確立しておらず、明確なガイドラインはない。British HIV Association の「HIV Associated Malignancies」、National Cancer Institute のホームページ「AIDS-Related Lymphoma Treatment」および National Comprehensive Cancer Network の「Non

Hodgkin's Lymphoma」を参考に日本人 ARNHL に最適化された治療手引きを作成し、国内でも活用されている。これをふまえて今後の国内外でのエビデンスを基に、「HIV 関連リンパ腫治療の手引き Ver2.0」に修正を加える予定である。

E. 結論

日本国内での HIV 関連悪性リンパ腫の診療・治療に有用と考えられる。

F. 健康危機情報

該当なし

G. 研究発表

論文発表

1) 味澤篤、永井宏和、小田原隆、照井康仁、上平朝子、四本美保子、萩原将太郎、田沼順子、岡田誠治 HIV 関連悪性リンパ腫 治療の手引き Ver 2.0

The Japanese Society for AIDS Research 15; 46-57, 2013

学会発表

(国内学会)

1) 佐々木 秀悟、関谷紀貴、柳澤 如樹、菅沼 明彦、今村 顕史、比島 恒和、味澤 篤 抗 HIV 薬と抗がん剤の併用療法が奏功した extracavitary primary effusion lymphoma を合併した HIV 感染者の 1 例 第 27 回日本エイズ学会総会・学術集会 熊本 2013

H. 知的所有権の出願・取得状況(予定を含む)

1. 特許取得:なし
2. 実用新案登録:なし
3. その他:なし